

音 樂 科

生涯にわたって音楽に親しむ 資質・能力の育成に向けた授業改善

～試行錯誤を繰り返し、音楽表現を追究する生徒の育成～

柳 下 康 明
大 浦 早 紀

1 研究主題について

(1) 研究の背景

令和の日本型学校教育の実現に向けて、平成29年3月に告示された中学校学習指導要領の確かな実施、さらに「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、「協働的な学び」とを一体的に充実させることが求められている。社会の在り方が劇的に変わる「Society 5.0時代」の実現に向けた政策の柱の一つに、「一人一人の多様な幸せと課題への挑戦を実現する教育・人材育成」を掲げ、探究力と学び続ける姿勢を強化する教育・人材育成システムの転換が目指されている。特に、困難への挑戦心は、現代社会におけるもっとも重要な資質の一つであり、その育成は重要な教育課題として位置づけることができると指摘されている。

(2) 研究主題設定の理由

こうした社会的背景を受け、本校音楽科では指導の個別化と学習の個性化の観点から、

①学習進度に応じ、柔軟な指導方法・教材等の提供・設定を行うこと

②生徒の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動に取り組む機会を提供すること

以上二点を踏まえながら、試行錯誤を繰り返し、思考力、判断力、表現力等を育成しながら音楽表現を追究することを重点とし、生涯にわたって音楽に親しむ資質・能力を育成していきたいと考えている。社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難になってきている中だからこそ、音楽そのものの価値を生徒自身が実感し、豊かな人生を歩んでいってほしいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究内容について

題材の指導において、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を基盤に、挑戦心を引き出す学習指導及び個に応じたフィードバックを工夫していく。音楽を形づくっている要素を捉えやすくし、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、他者と共有し共感をもたらす「思考力、判断力、表現力等」の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった「学びに向かう力、人間性等」の涵養を目指すこととし、音楽とより豊かに関わっていくための資質・能力を育成することをねらいとしている。

授業において、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動を基盤として、指導の個別化と学習の個性化を行いながら、本校音楽科では以下の二つの手立てを基に研究主題に迫った。

【手立て1】困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

【手立て2】教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

3 研究の実際

研究主題の達成に向けて，本校音楽科では困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する場面の設計や，教師や仲間との協働的な学びの充実の場면을意図的に設定し，検証を行った。以下に歌唱分野，器楽分野，創作分野のそれぞれの実践を記載する。

(1) 【手立て1】困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面の設計

- ・歌唱分野（我が国の伝統音楽「歌舞伎」の実践より）

長唄の声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりを理解するための実践として，教師の範唱に合わせて生徒がうたい，声の音色やうたい方，言葉の特性について気付いたことや感じ取ったことをワークシートにまとめる授業を展開する。試行錯誤するなどの挑戦する学びの設計として，一人一台端末を用いて長唄の範唱を指定の URL

（QR コード）から複数の奏者による範唱の動画を比較聴取し，それぞれの声の音色やうたい方，発声について気付いたことや感じたことについて意見交換をする。その後ワークシートに理解したことをまとめながら，どのようにうたえばよいか試行錯誤し，一人一人が自分自身の課題を捉え，その課題に対してどのように取り組むかを考える場面を設定した。



※長唄の範唱者による演奏例

- ・器楽分野（箏曲を扱った実践より）

箏曲の特性上，歌と伴奏を伴う楽曲が多い。そのため生徒は，歌と箏を同時に演奏することになり，どちらの技術も要求され非常に難しい。歌を同時に歌いつつ，その上で箏をどのように表現したらよいか，音色，旋律，強弱を手掛かりに考えることで，特に旋律の動きに合わせて，箏の音色や強弱を，どのように表現すればよいか，試行錯誤する場面を設定した。

- ・創作分野（ミニマルミュージックの音楽創作の実践より）

ミニマルミュージックの音楽を扱い，本題材の学習において，生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を「テクスチャ」，「構成」とした。一度聴いただけではなかなかこれらの要素を捉えることが困難であるため，様々なリズムの重なり方を知覚・感受し，どのような感じがしたかについてグループ内での意見交換を経て学級で共有した。そして，一人一人が表したいイメージと関わらせながら，試行錯誤しながら作品をつくる場面を設定した。

(2) 【手立て2】教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

- ・器楽分野（箏曲を扱った実践より）

ペア学習やグループ学習を中心に学びを進めていくように配慮する。どのように工夫して表現したいかについてグループ内で共有し，それが表現として実践できているかについて PC 端末を使用して撮影し，再びその演奏をペアやグループ内で共有することで，自分自身やグループの課

題を解決できるようにする。試行錯誤しながら音楽表現をする中で、仲間の表現の工夫を取り入れ、自身の表現が深まっていくようにする。「活動あって学びなし」といった授業にならないよう、ねらいを達成するための手段として「学び合い学習」を実践した。

・創作分野（サウンドロゴの音楽創作より）

本校美術科で実施した題材「これぞ名物！ご当地新駄菓子開発会議！」でつくった商品の魅力を伝えるサウンドロゴを創作した。本題材の学習において、生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を、「リズム」、「旋律」、「テクスチャ」とした。生徒のPC 端末に加え、オンライン楽譜作成ソフトウェア「Flat」を使用した。

教師はすべての生徒の楽譜データを共有しているため、いつでも生徒の楽譜データにアノテーション機能でコメントができる。それを活用して、生徒の創作の実態に合わせた生徒一人一人の個別のフィードバックを、ICT を活用して行った。生徒の思考・判断のよりどころとなる要素を効果的に捉え、思考力、判断力、表現力等の育成を目指した。

資料1の生徒には、「八分音符のリズムが続いているので、キャッチフレーズの抑揚に合わせて旋律やリズムを工夫してみたらよい」というフィードバックを行ったところ、生徒も教師のコメントに対して思ったことを返信している。最終的に提出された作品は資料2のようになり、歌詞の抑揚に合わせてリズム・旋律の要素を捉え思考・判断したことがわかる。それぞれの生徒の課題の進行に合わせてながら、適切なアドバイスを行うことができるよう工夫し、試行錯誤の過程の中で、生徒の思考力、判断力、表現力等がより深まっていくことができるようにした。

資料1 生徒に対しての個別のフィードバックを教師が行っている場面

このスクリーンショットは、Flatという音楽制作ソフトウェアのインターフェースを示しています。楽譜には「おとなのあじわい リッチなメロン」という歌詞が記されています。教師からのフィードバックコメントは、「生徒の作品に対しての教師のフィードバック」として表示され、「八分音符のリズムが続いているので、考えたキャッチフレーズの歌詞の抑揚に合わせて旋律やリズムを工夫してみたらどうでしょうか？」とあります。生徒からの返信コメントは、「味わい〜から旋律を歌詞の抑揚にあわせて旋律の動きやリズムを考えてみます」とあります。

資料2 教師の個別のフィードバックに対して、その後生徒が思考・判断した場面

このスクリーンショットは、資料1の楽譜に対して、生徒が教師のフィードバックを踏まえて修正した後の様子を示しています。修正された楽譜には、「おとなのあじわい リッチなメロン」という歌詞が記されています。教師からのフィードバックコメントは、「旋律が歌詞の抑揚に合わせてつくり、旋律、リズムともに工夫されている。」とあります。生徒からの返信コメントは、「生徒の返信コメント 旋律・リズムについて思考・判断した過程がわかる。」とあります。また、生徒からの追加コメントとして、「16分音符を入れました。リッチなは歌詞の抑揚に合わせて旋律の動きを変え、リズムを工夫しました」とあります。

・鑑賞分野（交響曲第5番ハ短調の実践より）

鑑賞の導入において動機のリズムについて紹介し、この動機の八分休符について注目させ、この休符によって生み出される緊張感、演奏や表現の難しさについて理解できるようにした。例えば互いの生徒同士でこの動機のリズムを手で叩いたり、指揮を振る生徒に合わせて、他の生徒が動機のリズムを手で叩いたりしながら、動機のリズムの面白さや魅力について、気付けるようにした。特に、この交響曲第5番ハ短調については、動機の反復によって主題が構成されていることを実感を伴って理解し、曲や演奏に対する評価とその根拠について考え、音楽のよさや美しさ

を味わうことを大切にしたい。動機のリズムの面白さや魅力について他者と共有しながら、知覚したことと、感受したこととの関わりを確実に捉え、他者と論じ合い、批評する活動を取り入れ音楽を聴き味わうことが一層深まる場面を設定したい。

4 成果と課題

成果として、題材の学習を通してどのように変容したかについて具体的に記述させることによって、音楽に対する価値を深めていくことができるようにした。例えば歌舞伎の学習であれば、我が国の様々な伝統文化と、歌舞伎を関連させることによって我が国の伝統音楽に対する価値を深めていくことができるようにした。我が国の様々な伝統文化を継承・発展させることの重要性について、学習したこと関連させながら深く考え、音楽と深く関わっていかうとする態度を育成することができた。

また、創作分野において一人一台端末を用いたことで、リズム、旋律、テクスチャや音の高さなどを目で見てすぐに確認したり、実際につくった音楽をすぐに聴いたりすることができることで、表現したいイメージと音楽とを関わらせながら、他者と共有したり聴きあったりする協働的な学びの充実を図ることができた。身に付けさせたい資質・能力においても、学習の支えとなる〔共通事項〕を捉えやすくなり、知識及び技能を効果的に得たり生かしたりすることができるようになったことから、特に思考力、判断力、表現力等においての変容や深まりが見られた。

課題として、①「知識及び技能の確実な定着」②「音楽を伴いながら創意工夫をすること」が挙げられる。①については、時間数の関係上、十分に知識や技能を得たり生かしたりすることができず、思考・判断させてしまう場面があった。よりふさわしい表現方法へと工夫する中で、音楽表現の基盤となる技能を身に付けさせていく。②については、ワークシートへの記入等で音楽を伴わない時間が生まれてしまうということである。歌いながら、演奏しながら、聴きながら、創意工夫していく過程を学びの手立てとして定着を図っていく。

今後も、生涯にわたって音楽に親しむための指導計画や実践を積み重ね、主体的・創造的に取り組むことができるような効果的な導入や指導法、評価規準の設定、ワークシートについて検証し、どのようにすれば生徒の資質・能力が効果的に高まっていくのかについて研究をしていく。また、協働的な学びの視点から、生徒が必用感をもって協働的な活動に取り組み、互いに資質・能力を高め合えるような学習活動になるような指導と評価についても研究をしていく。音楽の表現活動を通して、生徒が音楽のよさを味わい、愛着をもち、生徒自身の考えをより深めていくためにはどのような指導の工夫をすればよいのか、他教科の学びとも関連付けながら研究していきたい。

5 引用・参考文献

- ・ 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 音楽編』
- ・ 国立教育政策研究所（2020）『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』
- ・ 文部科学省（2021）『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』
- ・ tutteo.Ltd オンライン楽譜作成ソフトウェア「Flat」